

母語を育む

カンタベリー日本語補習校附属幼稚園

園長 佐藤絹代

本園は、一九九八年に日本語補習校幼児部として開設されました。それ以前に実施していた「日本語学習会」の経験から、海外での日本語継承は母語形成期である幼児期こそが大切だと痛感しています。保護者のうち、長期滞在者や国際結婚の家庭が七〇%以上を占める当地ならなおさらのことです。

開園にあたり、異文化の中の子どもたちにどのような教育を施すのか、それを実施するに当たり、何歳からの受け入れが適切なのか。それらについて熟慮のうえ検討しました。幼児教育の大切さは、掛け声ばかりでは画に描いた餅に終わってしまいます。幸いにも日本での長い保育経験を持つスタッフに恵まれ、日本とニュージーランドの幼児教育について熱く議論をぶつけ合うことができました。名前は「くん・さん」づけで呼ぶのか、四季の違いによる行事の取り扱いをどうするのか、などなど。その結果、現地の実情に合った教育計画を立て、自主教材も作成しました。これらは、日々の実践を重ねて試行錯誤しながら現在に至っています。



幼稚園の受け入れ時期は、現地教育機関に入る時期（幼稚園・三～四歳、小学校・五歳）としました。日本語だけで育った子どもも、現地の幼稚園生活が半年を過ぎるころには英語しか口にしなくなることもまれではありません。幼児の日本語離れを食い止めると共に、日本語集団の仲間入りをさせるためにはこの時期こそが大切なのです。現在は、現地校に合わせた四学期制。年長児（三十三名）は一年間、年中児（二十五名）は半年間、各二時間の教育課程を設け、教員四名とともに通算一年半の日本語教育を実施しています。

「ともだちいっぱい にほんごいっぱい」一。この場所・この時間は日本語の社会なのだ子どもに意識づけることによって、子どもは自ずと言葉を使い分けるようになります。同じ日本語を話す友だちの中で体験しながら覚えた言葉は、繰り返し使ううちに定着し、新しい言葉を生み出します。「小さい「つ」は言葉が跳ねるんだ」と覚えた子どもが、「みっかん、とって」。「ばっなな、とって」と話してお母さんを仰天させました。子どもの想像力の豊かさは大人たちを驚かせ、大笑いさせます。



大人たちは、自分が日常話す言葉も、本人が気づかぬうちに使い慣れた英語に置き換えてしまうことがあります。特に多いのが、叱る言葉。英語を使う傾向が強い家庭に対してはとくに、子どもがスムーズに幼稚園の生活に入れるように、送り迎えの車の中から日本語で話すムードをつくってくださいとお願いしています。

本園での日々は、日本語補習校へ入学させる準備期間でもあります。そのため、日本の行事や文化活動、幼児の遊び、ひらがなの導入を大きな柱としています。また、各学期に日本の行事を取り入れています。学期末には、団子づくりや野菜スープづくりなどをし、終業時に家族と一緒にお弁当ピクニックを楽しめるように工夫しました。新年を迎えると、クラスから歌・ダンス・劇の練習に励む子どもたちの声が聞こえてきます。幼稚園の晴れ舞台、「学習発表会」の練習です。



年中児は、身体を動かしながらの学習が中心。平仮名カードと実物や絵カードを使って語彙を増やす工夫をしています。年長児は、毎週一〜二文字の平仮名の形と書き順を赤、青、黄色、緑のクレヨンで練習。色の順番による書き順の指導は小学校へと引き継がれ、一年生の文字指導にも役立っています。また、「しゅうかん読書」として毎週一冊ずつ本を貸し出し、保護者に読み聞かせを勧めています。これはカンタベリー日本語補習校全体の取り組みで、およそ一〇〇〇冊の「しゅうかん読書」用の本のほか、三〇〇〇冊の一般用図書を所蔵しています。

海外で育つ子どもにとって現地語（英語）は彼らの生活そのものです。集団に仲間入りするために子どもたちは必死で英語を覚えます。このような環境の中で日本語を習得させるためには、日本語社会が重要な役割を果たします。幼稚園はまさに子どもたちに開かれた日本語社会。パソコンなどの情報機器だけでは子どもの母語は育まれないと思います。教師、保護者ともに子どもたちとの強い絆を育むこと。それこそが、子どもたちの日本語習得の大きなカギと言えるのではないのでしょうか。